

令和8年8月24日

奥多摩町観光産業振興計画策定委員会 第2回 議事録

日時：令和8年8月24日（月）午前10時00分～12時00分

場所：奥多摩町役場地下1階 会議室

参加者（敬称略）：

【出席委員】

原島 俊二（委員長）、青木 高幸、小笠原 広志、田治米 伸康、鈴木 清春、
原島 幹典（副委員長）、野坂 美穂（WEB 参加）

【欠席委員】

増田 昭太郎、塩野 廣行

【事務局】

大串 清文（観光産業課長）、小峰 淳一（観光商工係長）、
小林 雅樹（観光産業振興アドバイザー）、加藤 洋平（農林水産係長）、
八間川 結子（さとゆめ）
※森林保全活用係・鈴木 敏春（課長補佐）は欠席

【オブザーバー】

渡辺 舞（沿線まると株式会社）、日高 未紗子（株式会社 HIS）

〔次第1 開会〕

小峰係長

こんにちは。定刻前ではございますが、皆さんお揃いですので、これよりですね、第2回奥多摩町観光産業振興計画策定委員会を開始させていただきたいと思います。本日、司会を進行いたします奥多摩町観光商工係長の小峰でございます。よろしくお願いいたします。以降、着座にて失礼いたします。

本日ですね、委員の皆様お揃いですが、増田委員と塩野委員につきましては、欠席のご連絡を受けておりますので、ご報告させていただきます。また、この名簿にはございませんが、オブザーバーということで、沿線まると株式会社から山田様、渡辺様、株式会社 HIS より日高様が参加されておりますので、併せてよろしくお願いいたしますと思います。

それではですね、早速ではございますが、次第に沿いまして進めさせていただきたいと思います。次第の2番、委員長挨拶、原島委員長、よろしくお願いいたします。

〔次第2 委員長あいさつ〕

原島（俊二）委員長

皆さん、おはようございます。月末を控えた月曜日、週の始めの午前中の会議ということで、皆さん大変お忙しいところかと思います。ご出席いただきましてありがとうございます。今日は一日、どうぞよろしくお願いいたします。

小峰係長

原島委員長、ありがとうございました。それではですね、次の3の報告事項に移らせていただきたいと思います。報告事項3、議題の4につきましては、原島委員長の方で進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

原島（俊二）委員長

それでは皆さん、進行を進めさせていただきますが、どうぞよろしくお願いいたします。3番の報告事項、（1）から（3）まで、事務局の説明をお願いいたします。報告事項の3番まで一括ということでよろしいですか。

小峰係長

はい。

原島（俊二）委員長

じゃあお願いします。

〔次第 3 報告事項〕

【報告事項① 第 1 回ワークショップの結果について（資料－ 1 P3～7）】

さとゆめ・八間川

皆さま、おはようございます。計画策定業務を担当しております株式会社さとゆめの八間川と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。お手元の資料 1、こちらの資料に基づいて、私からご説明させていただきます。

まずはお手元資料 1 の 2 ページ目をご覧ください。本日大きく 2 つ、ご報告とご協議をお願いしたいと考えております。まず議題の 3、報告事項の部分を進めさせていただきます。ご報告事項は 3 点ございます。第 1 回目の委員会から本日までの間に、計画策定の取組として実施した事項のご報告をさせていただきます。1 点目が町民向けのワークショップ、2 点目、好きな奥多摩マップの掲示、最後に来訪者アンケートについてご報告をいたします。

後半のご協議については、計画のビジョンに込めるべき要素と、誘客の想定ターゲットについてお話をさせていただければと思っております。計画の一番上流にあたる、奥多摩町の観光がどこを目指すのかという部分を、委員の皆様と一緒に決めさせていただきたいというのが、本日の協議事項の趣旨でございます。また、具体的な施策ですとかアクションプラン、また目標指標については、次回、第 3 回の委員会で協議をお願いする予定でございます。本日はその前段として、方向性を固めさせていただければと考えております。

ではまずは、報告事項の部分からご説明させていただきます。お手元資料3ページ目をご覧ください。ご報告の1点目、7月1日に実施いたしました第1回の町民ワークショップです。こちらは全町民の皆様を対象に、チラシの全戸配布と防災無線にて周知をいたしました。また併せて、小中学校には、児童・生徒さん向けにやさしい表現の子ども向けチラシを別途作成し、学校を通じて全員に配布をいたしました。お手元資料の右側に掲載しているものが、そのチラシとなっております。

周知を行い、その結果、7月1日水曜日の夕方4時から6時に、奥多摩町福祉会館にて、21名の方にお集まりいただき実施をいたしました。参加者の年代としましては、グラフのとおり、小学生から80代まで、すべての世代の方にご参加いただけたというのが、まず何よりよかったところかなと考えております。

内容、進め方については、まず21名皆様に自己紹介をいただいた後、4グループに分かれました。4グループで3つのテーマについて、ディスカッション、また全体向けのシェア・共有を行っております。3つのテーマについて、1点目は、奥多摩町の宝、皆さんの「いいな」と思うところ、宝物を教えてくださいというのが1点目。2点目は、一方で「もったいない」、もっとこうだったらいいのと思うところ。最後に、10年後に奥多摩町がこうだったらいいなという「ありたい姿」の3点について、ディスカッションを行いました。

次の4ページ目をご覧ください。こちらは実施後の参加者アンケートの結果となっております。アンケートは18枚、回収率90%となっております。満足度については、肯定的なものが78%、また進め方・時間について「ちょうどよい」が89%、最後に、次回以降の参加は83%が前向きとお答えいただいております。

ワークショップは、今年度1年間で全3回を予定しております。ワークショップの目的は、町民の皆様のお声を広く伺うということが主な目的ではございますが、併せて、町民の皆様と一緒にこの観光産業振興計画を作っているという認知を広げ、計画を実行に移す段階での機運を醸成するということも目指しております。

(資料5ページ) 出された意見についてです。奥多摩町の宝としては、自然景観が圧倒的に多く挙がりました。加えて、わさびやわらび、はちみつ、川魚、ジビエ、地ビールといった食品・

特産品、またお祭りや伝統芸能、歴史というものも挙がっております。さらに、こちらは全てのグループから挙がった部分ですが、人柄や気質、一致団結という奥多摩町民らしさ、住んでいらっしゃる方々ご自身のことも宝として挙げられていた点は、とても印象的でした。

2点目のテーマです。奥多摩町の「もったいない」と思う部分については、移動の足、二次交通や公共交通が弱いことであったり、お店や宿、温泉、遊び場というものが少ない、電波やネットが弱い、空き家・空き店舗が未活用であること、というようなインフラに紐づくようなことに加えて、さらに、素材はあるけれども、奥多摩町の魅力、先に申し上げたような食であったり特産品というような素材はあるが、商品化や発信が弱い、という声も複数のグループからいただいております。

最後に、10年後の奥多摩町のありたい姿についてです。こちらは、若い世代が増え、移住・定住が進み、奥多摩町に住んでいるということが誇りに思える町、という声が、ほぼ全てのグループから挙がっております。ありたい姿について、全ての3テーマに共通してですが、あまり狭義の観光ということを意識せずに、町民の皆様の声を幅広く教えてください、という形でワークショップを行いました。その結果、ありたい姿として、今申し上げましたように、自分たちが住んでいるという誇りにもつながりたい、という声が出たことは印象的でありました。観光産業振興計画ではございますが、町民の皆様ご自身が、町がどうなってほしいか、どうしたいか、という視点でお答えいただけたものと受け止めております。

続きまして、6ページ目をご覧ください。こちらはワークショップを踏まえての、簡単ですが所感となっております。まず、多世代にご参加いただき、満足度も高く、スタートとしてはよいものが切れたものと考えております。一方で、今回は、先ほど申し上げたように、観光にとらわれずという、テーマの抽象度をあえて高く設定をしたため、話す時間が足りなかったというようなお声もいただいております。

第2回は9月30日を予定しておりまして、こちらについてはテーマを絞り、さらに対話の時間を厚くしたいと考えております。本日の委員会の後半の協議ですとか、今後の協議にもつながりますが、具体的にどのような施策を行うのかですとか、目標について、ワークショップでも取り扱いをしたいと考えておりますので、より具体的なお話ができればと、第2回については考えております。

また、今回、全町民対象のワークショップは3回行いますが、それは続けつつ、より個別具体のお声を拾うために、古里小学校、また観光事業者の皆様向け、さらに役場の若手職員様向けのワークショップも、それぞれ開催する予定であります。

7ページ目です。こちらは当日の様子となっております。このような形で、付箋を貼ったりすとか、グループワークをして進めました。

【報告事項② あなたの好きな奥多摩教えてマップについて（資料－1 P8）】

さとゆめ・八間川

続いて、8ページ目です。ここからご報告事項の2点目となります。「あなたの好きな奥多摩を教えて」マップの掲示です。こちらは写真のようなマップを掲示しております。目的としましては、ワークショップにお越しになれなかった町民や子どもさん方、また、ちょうど今、夏休みの時期で来訪者の方も多いため、そういった来庁者の方の声を広く拾うために、またワークショップを補完する取組としても実施しております。併せて、こういったマップを掲示することで目に留まりますので、計画を策定しているということの周知も兼ねられたら、という意図でございます。

こちらはマップを町の地図に直接書き込んでいただく方式で、ペンも併設しております。掲示期間は8月8日から開始をしております、夏休み期間中の31日までで予定をしております。現在、掲示をしているのは、奥多摩駅、鳩ノ巣駅、またAUBA（アウバ）に掲示をしております。すでに複数書き込みいただいております、町としてもご存じなかったような場所もあるように聞いております。また、掲示終了の際に取りまとめてご報告をさせていただきます。

また、こういったマップが掲示してあること自体が、町内外の方に「こんなところがあるのか」と知ってくださるきっかけにもなるかなと思っておりますので、集まった内容は計画の中でも活用を進めてまいります。

【報告事項③ 来訪者アンケートの実施について（資料－1 P9）】

さとゆめ・八間川

続きまして、9 ページ目をご覧ください。こちらはご報告の 3 点目、来訪者アンケートです。こちらはもともと、沿線まるごと株式会社様が過去 1 年間実施されてきたアンケートを土台に、計画策定のこの機会に、町として掲示場所と周知を強化させていただいたものです。こちら 8 月 8 日から今月いっぱいの 31 日まで、町内 14 箇所では掲示をして実施をしております。全部で 14 間、所要時間 3 分ほどで、夏休み期間中は来訪者も多いですので、目標は 100 件ほど、今月回収をしたいと考えております。

設置場所は、もえぎの湯や氷川キャンプ場をはじめとする奥多摩総合開発の観光施設、また大丹波釣り場、水と緑のふれあい館、そして JR の奥多摩駅、鳩ノ巣駅など 5 駅、山鳩様にも掲示をして設置をさせていただいております。

こちらの計画への活用方法としては、今後、具体的な施策、アクションプランや目標を策定するにあたっての、現在の基準値として使わせていただくために、アンケートを取得しております。具体的には、例えば日帰りから宿泊への転換の目標数値やモニタリングをするため、さらに 1 人当たりの消費額や満足度と再訪意欲、そういったものを、策定年度である今年度の数値として押さえ、基準とし、来年度以降、毎年成果をモニタリングしたいと考えております。

集計サマリーはお手元では見づらい部分もございますが、掲載をしております。現時点で、8 月 16 日時点で、201 の回答をいただいております。こちらは、昨年の 8 月から先週までの 1 年分で 201 件となっております。

簡単に現状のご報告を申し上げます。居住地は首都圏 1 都 3 県で 90.5%、うち東京都が 60%と、その内訳は 23 区よりも多摩地域が多いという結果になっております。近隣からいらっしゃる方が、アンケート回答については多いというふうに読み取れます。また、来訪者のうち日帰りが 78.1%、宿泊が 21.9%、宿泊された方の 9 割以上が 1 泊となっております。また、来訪回数は初めての方が 33.3%、10 回以上の方が 27.4%と二極化しております。人気のスポットとしては、日原鍾乳洞や奥多摩湖、鳩ノ巣溪谷、もえぎの湯という順になっております。満足度は 5 点満点で平均 4.42 となっており、「不満」というお声は今のところゼロとなっております。

ご報告の部分は以上となっております。もしご報告事項でご質問ですとかご確認事項があれば
お願いいたします。また、アンケート、マップ揭示と合わせて8月31日まで実施しております。
最終的な集計と分析は、次回第3回の委員会でご報告をしたいと考えております。

原島（俊二）委員長

ありがとうございました。それでは、報告事項の中で、1、2、3、3つについて、ご質問があり
ましたらお受けいたします。どうでしょうか。

小笠原委員

商工会議、商工会も集めてワークショップをやってくださるというふうに聞いたんですけど、
それはいつごろを考えていますか。

さとゆめ・八間川

秋、9月から10月に考えております。

原島（俊二）委員長

それでは、内容が内容ですので、どんどん議題の方に移りたいと思います。よろしくお願
いします。これを一つずつご質問をお願いします。議題の（1）、観光産業振興計画策定について、説
明の方をお願いします。

〔次第4 議題〕

【議題（1）-① 計画のビジョンに込めるべき「要素」について（資料-1 P10～12）】

さとゆめ・八間川

ありがとうございます。それでは、引き続き、協議事項に入らせていただきます。お手元、ま
ずはそのまま10ページ、11ページ目をご覧ください。こちらは本年度に策定をする計画の目次
案となっております。

まず、第1章と第2章は、前回1回目の委員会で基礎調査としてご報告した内容を書き込んでまいりますので、こちらは割愛をさせていただきます。11ページ目をご覧ください。本日も協議させていただきたいのは、こちらの第3章の3-1、将来ビジョンと、3-2、想定ターゲットとストーリーの部分でございます。3-3の基本目標、また第4章のアクション、第5章の推進体制については、次回第3回で協議をお願いしたいと考えております。目標の数値については、具体的なアクションと一体でなければ、あまり意味がないといえますか、分かりづらい部分もございますので、本日は3-1と3-2のみという切り分けをさせていただきます。

また第3回に向けてのお話ですが、先に3点申し添えます。まず1点目、本日も議論をいただくビジョンから、さらにアクション、そして指標へと、どうつながっていくのかというのを、1本の分かりやすい図、ロジックモデルというか、枝分かれの図として、第3回の際にお示しをいたします。

2点目、指標には観光消費額、指標の部分はまだ記載をしていないんですけれども、例えば観光消費額がアンケートでどの程度増えているか、どの程度消費されているかを取っておりますが、その消費がどれだけ町内に残るのか、町内の事業者・生産者様からの調達がどの程度あるのか、という地域経済への波及を測る指標も、併せて設計をいたします。

最後に、アンケートの部分について、なぜ奥多摩町か、リピーターが先ほど半分と申し上げましたが、そういった動機の部分は、アンケートでつかみきれない部分がございますので、駅の拠点ですとか、ちょっと個別のインタビューなども検討し、第3回でご報告をできればと考えております。

では、計画のビジョンについて、ディスカッション、協議をさせていただきたいです。12ページ目をご覧ください。まず、ビジョンは最終的に一文のテキストにしてまいりますので、本日はあえて、私どもから文案というか、「これがビジョンです」という一文を、意図的に出しておりません。と申し上げますのは、先に文案を示しますと、今日の議論が、委員会の中でその文言の中だけで始まって終わってしまうので、意図的に記載をしておりません。委員の皆様は、町内の事業者様であり、同時に町民でもいらっしゃるご承知をしておりますので、奥多摩町の観光の計画に、これは絶対に込めるべきだと思われるような思い、要素を、お一人ずつ一言頂戴できればと考えておるところでございます。

まず、とはいえ、議論のたたきというか、起点として、私どもで考えております濃淡、中心となるような部分ですとか、派生していく部分ですとか、そういった部分を3段階でお示しをさせていただいております。ご説明申し上げます。

まず、このグラデーションの真ん中、中核、ビジョンの中核となるような部分、前面に出す、奥多摩でしか言えない固有性として考えている部分です。ワークショップですとかアンケートの結果なども踏まえて考えているところとして、町全域が国立公園であるということ、そして多摩川の水源地であるというような自然資源、こういった部分が、ワークショップやマップでも、自然景観というのが圧倒的に多く挙がっております。また、そこに住む方の暮らしですとか気質が重なり、そこに惹かれて人が訪れ、住む方の誇りにもつながっていく、というような流れが生まれる、生み出したいというふうに考えております。ですので、この構造、町全体が国立公園であり、水源があり、そこから人が来て、生業につながる、というような構造部分を中核に据えたいと考えております。

次に、その周りの柱の部分です。今回策定をする計画から起こす変化として、日帰りや通過型が現状多いというふうに考えられますが、滞在や再訪、さらに関わりへ転換をしていく、こういったところが、計画の中で目指していく変化として書き込みたいと考えております。こちらは現状の奥多摩町様の観光の課題の裏返しでもあると考えております。日帰りが多いという部分ですね。そちらをいかに滞在型や再訪、関わりへ変えていくか、という部分を、しっかりと計画に書き込みたいと考えております。また加えて、首都・東京に一番近い大自然という立地、こちらはアクセスの良さゆえに日帰りになるという原因でもあります、一方で武器でもございますので、武器として活用可能なように、計画の中でも書き込んでまいりたいと考えております。

最後に、一番外側の土台ですとか彩り、派生していくものを付け加えるものとして、第1回目の委員会でも申し上げました、日本版持続可能な観光ガイドライン、JSTS-Dに沿った持続可能性を、進め方の背骨にしたいと考えております。また、ワークショップの中でも、良いものがあるのに自然の影に隠れている、というお声のあったお祭りや伝統芸能などの物語、文化も、織り交ぜるようなことを考えております。

ビジョンの一文がないがゆえに、逆に抽象度も高いものにはなっておりますが、本日お伺いしたい、ご意見いただきたいなどと思っている部分は、まず、中核から織り込む要素として、こうい

った方向性でいかがかという点でございます。「ここは中核ではない」ですとか「これが抜けている」ですとか、そういったご意見をぜひ頂戴したいと考えております。例えば、お祭り・伝統芸能を彩りというか織り込む要素に置いておりますが、こういった位置づけでよいか、ですとか。あとは、町内の事業者様としての視点で、中核をこういった自然資源や景観というものに置いているが、こういった方向で例えば商売が成り立つか、という観点であるとか、商工業の観点から抜けている要素がないか、汲み取りづらい要素がないか、ですとか、そういった部分をコメントいただければと考えております。

こちら、ぜひ本日頂戴した意見を持ち帰り、ビジョン文案を今後作成して、次回の委員会でお示しをしたいと考えておりますので、よろしければ皆様からご意見を伺えれば、というのが、本日の協議事項1点目となっております。

原島（俊二）委員長

ありがとうございました。観光の理念みたいなもの、それについてお話しいただきましょうか。

〔状況説明〕以下、委員・事務局から順にビジョンへの意見を聴取。

小峰係長

観光商工係というところで、観光もそうなんですけれども、やはり今この時期だからというわけではないんですが、河原のマナーとか、そういった部分もございまして、やはり中核のところ、「町全体が国立公園なんだよ」というような認識というのが、まだまだ皆様に知られてはいない、というようところがございまして。実際、私たちの方も「ここが国立公園だよ」というようなお話をしながら、河原の方に啓発をしたりとか、そういったところをしているところなんですけれども、実際、来る人がやはりそういう「国立公園だ」というような認識でいるのであれば、この町の中の、観光に訪れる人のマナーだったり、そういったものもよくなるし、実際、その景観と一体となって、この土台の彩りの持続可能性というところにもつながっていくのではないかな、というふうに考えているところですので、実際、この国立公園というところは、やはり核になっていくのではないかな、というふうに思います。

また、柱のところということで、計画で起こす変化というところで、日帰りから滞在型にシフトをしていこう、というところは、やはり一方通行で、というか、一日で過ごしていただくとい

うよりは、二日、三日かけてですね、この町全体を知ってもら、また楽しんでもらう、というところで、一番大事な部分ではないのかな、というところなんですけれども、やはり、計画で起こす変化の中で、滞在型に関連するものは、やはり日帰り型にないものを新たに何か作り出さないといけない、というところなので、実際そういったところを計画に盛り込んでいければ、というところで、この後の各係の、計画に盛り込みたいものだったりとか、そういったものが紐付いてくるのではないかな、というようなところでございます。私の意見が「こうである」というような答えが実際にはないので、観光商工係としては、その部分が一番強く今、感じているところなので、そのような形で今、申し上げたところです。以上です。

原島（俊二）委員長

ありがとうございました。国立公園を売りにするという意味では、今、奥多摩町のまちづくり委員会が国立公園のところを打ち出そうとしていますが、国立公園のまちづくり、ぜひそこと連絡を取り合って、いいものがあつたらいただければいいんじゃないですか。

小峰係長

そうですね。今年度に入りまして、河原に掲示する看板なんかも、実際、まちづくり委員会の方のご意見もいただきながら、というようなところでやっておりますので、今後も連携をして、実際「ナショナルパークだよ」「国立公園だよ」というのをアピールしながら、というところやっていければな、というふうに観光商工係としては考えているというところです。

小笠原委員

商工会議所ですと、やはり事業者の、商工業サービス、これらの方々を支援する立場から見させていただきますと、商業サービスになりますと、やはり飲食店がやっぱり多いということになりまして、ただ、飲食店になりますと、奥多摩で開業する場合は、かなり冬の時期がお客様の動きが少ないということですので、どうしても12月から3月ぐらいを除いた8カ月間くらいで生活して、利益を上げていく仕組みづくりをしなければいけない、というところがありますので、後ほど出てくると思いますが、創業の支援という形で、お店を始めやすい環境づくりができればな、というところは考えております。さらに、お店を借りやすいというところにもなります。

会議所として巡回して感じるのが、お客様で、今、ペットを飼っていらっしゃる方が結構いらっしゃる、ペット連れということで、もともと商工会議所でもペットマップを作りまして、

「ペットと一緒に行けますよ」というお店を、今、マップを作りましたが、結構好評でしたので、奥多摩という場所を生かして、ペットがちょっと歩き回れるとか、というような、奥多摩ならではのものができると。まだ川とか山とかありますので、両方がいいのかなというのを、ちょっと思っているところです。以上です。

原島（俊二）委員長

ありがとうございます。鈴木さん、お願いいたします。

鈴木委員

私の方は、内水面の方の関係で引用されていまして、資料3の際に、また、ご理解をいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

原島（幹典）副委員長

もしくは、一部で、肅々と進むものに水を差すようなニュアンスになるかもしれませんが、せっくなので、自分の考えでいくつか感じていることを申し上げたいと思います。

観光産業を振興するという計画なわけですが、観光産業から視点を上げると、当然、今の進め方でももちろんいいかとは思いますが、それを進める、その意味とかですね、意義とか、あるいは担う人というところに視点を変わるとですね、私は今の進め方というのは、奥多摩全域を平準化して、さらにそれを東京、商業圏とつなげていくような発想になっていくんだろうと思うんですね、当然。ただ、それは今までずっとやってきたことでもありますし、正直言うと、あまり魅力を感じない、面白みを感じない、というふうに個人では思っています。

こういった奥多摩のような地域で、今の時期に取り組んだらいいと思う、そのポイントとしてですね、奥多摩には自治会というのが21でしたっけ。

事務局

21から、小河内が統合して18です。

原島（幹典）副委員長

18、今、なって存在しています。この自治会というのは、古い言葉で言えば集落、部落という名前で、おそらく鎌倉時代の末期頃から人が住み続けてきて、その地域に根ざす暮らしを、つい最近まで保ってきた単位なんですね。生活単位なんですね。そこから統合されて、より広域な行政単位にどんどん今なってきて、今現在は奥多摩というものすごく広いエリアに全部ひっくるめられて語られているわけですが、実際にその集落単位の実情を見ると、ものすごく大きな差が現時点では出てきていますし、周辺地域の集落は、先ほど課長もおっしゃられたような、すでに統合せざるを得ない状況に追い込まれている。もちろん、人口減少が一番かと思いますが。

それに対してですね、奥多摩全体に平べったく観光振興を打ったところでですね、結局、特に周辺地域の人たちは、もうすでに諦めの境地に入っているような気がします。もう閉じるしかない、消滅するしかない、というムードが非常に漂い始めていると思います。もちろん、それが時代の流れなので、避けること、抗うことは難しいかと思うんですが。

ただ、観光サービス業の魅力というか、観光客の魅力ってどこにあるかって考えると、消えてしまうかもしれないような生活や、文化や、歴史や、芸能とか、そういったものに触れたときに、ものすごくやっぱり心が動く。それは私は観光の原点だと思うんですね。それは、世界中に一つしかない、その地域の人たちが300年、400年の間、保ってきたけども、もう無理です、消えます、ということが、もう誰の目にも明らかなものが、奥多摩の周辺集落にはたくさんまだ残っている。だけど、それはもうおそらく、あと10年、20年先にはなくなるだろう、というのが見えている。私は、そこに観光資源としての魅力があるんじゃないのかな、というふうに考えます。

そう考えると、やはり、この観光ビジョンの中の、その対象、単位というんですかね、アクションを組み立てていこうとする単位としては、奥多摩全域のことを考えるよりも、やっぱり集落単位で、この集落は今どういう状況で、その集落の人たちにとって、どんなことがあると心が動くのか、自分たちが本当に思っている言葉で語り出すのか、あるいは「老体に鞭打って、じゃあ最後にもう一つ挑戦するか」みたいな気持ちになるか、とか。多分、そのところに観光政策というものがアプローチしていったときに、大きな変化が起きる可能性を秘めているような気がします。

その、そういった魅力を、外部の人が上手に、観光サービスの経済効果を伴うような仕組みをそこに落とし込めたときに、とても何か有益な出来事があるのではないのかな、という気が

していますので、もしできることであれば、全域の話に終始するのではなくて、個々の、その 300 年、400 年の歴史を持った集落単位で、ぜひ見ていただきたい。

で、一つの成功例があれば、他の集落の人たちも何か気が付くような気もするし、自分事に、初めてその段階でなるんじゃないかと。今も多分、あのやり方だと、地域の人たちは自分事ではないんですね、残念ながら。これは、行政とコンサルさんが進めていることを、はたから眺めているだけの事業になってしまうのではないかと。それは、とても残念だな、という気もします。これは、どんなに呼びかけても、おそらくなかなか届かない。こちら側がその集落の近くまでやっぱり行って、直接触れ合わないと、そこは難しい。だから、すごく手間のかかる、時間のかかるところなので、なかなか今回のこの中では難しいかと思いますが、私は、核心はそこにあるだろうと思っています。以上です。

原島（俊二）委員長

ありがとうございました。次に、じゃあ、青木さん、お願いします。

青木委員

中核という部分で、住む人の誇りみたいなことが書いてありますけれども、誇りというのは、やっぱり奥多摩というのは、自然が豊かで、素晴らしい景観があるというところじゃないかなと思って、自然というのは外せないと思うんですけども。

今、奥多摩に住んでいて、自分は商業地みたいなところにいるんですけども、奥多摩らしい、山にも登ったりするんですけども、「ここは住んでみたいな」というところが何点かあって、そういうところをやっぱり住んでいる人というのは、もうまさに誇りを持っているというか、景観に自信を持っているというか、「貸さないよ」みたいな形で、次の子どもたちにも住みたい、みたいな、そんな場所がいくつかあるんですけども。まあ、原島さんが言われたように、そういうところに重点を置いて開発するのもいいんじゃないかな、と思うんですけども、何せ「じゃあ地元の人がやってみろ」というのは、リスクもあるし、なかなか資本がないから、失敗したらどうしよう、みたいなことが大きいので、やっぱり外からの資金も借りてやれば、またいいのができるんじゃないかな、と思いますけれども。そういう意味では、さとローグさんなんかは、なかなかいいことをやってもらっているな、という意識では見せられてありますけれども。

あと、小笠原さんがペットの切り口を言ったんですけれども、私は、あまりにもたくさん作ってしまうとちょっと公害になると思うんですけれども、薪っていうか、杉もいっぱいあるんで、煙突の町っていうか、薪ストーブを使える町。いろんなところに作ってしまうと「煙がすごいよ」っていうふうに言われるんで、特区みたいなので、薪の地域みたいな、薪の家の地域みたいな感じになって。木はいくらでもあるんだから、それをやりたい人もいるんじゃないかな。都会では、煙なんか出すとすごい公害になって、奥多摩でもあんまり中心部でやるとちょっと洗濯物が、みたいな形ではあるんですけれども、これだけ木があって、大きい木になってるんで、これを消費しながらって言っちゃおかしいですけれども、使いながらやってもいいんじゃないかな、っていうふうには思いました。そういう、ペットの切り口じゃない、山の切り口ということで。以上です。

原島（俊二）委員長

はい、ありがとうございます。田治米さん、よろしくお願いします。

田治米委員

ビジョンはどこから出てくるかっていう観点で、これは総合計画のものと個別計画という形になります。基本構想としてですので、基本的には、長計から持っていく、その将来像から持ってくるのが、一番筋が通るというか、これまでの計画との整合性が立ってくるかな、というふうに思っています。

長計で言われているのは「自然の中で私が暮らし、つながり、挑戦できる（奥多摩）」というところで、主語が「私」として書いてある。その理由まで書いてあるというところで、住民のバイブルとして自分事にするということ。先ほど副委員長がおっしゃられたこととつながってくるかなと思っています。そういう意味では、ただ自治体とコンサルが下ろした計画ではなくて、自分事、「私が」というような主語になって、自分事になってできるようなビジョンの書き方にしないと、「これ、事業者さんだから」とか「間違えていることだから」というふうになってしまうので、そういった視点で、そのビジョンという言葉をつないでいくのがいいのかな、というふうに思います。

その上で、中核で書いてあるようなところ、「国立公園×多摩川の水源」というところもいいかなとは思いますが、その後、個別の資源、林業とか、わさびとか、伝統芸能とか、そ

ういったところがちょっと横並びに見えてくるので、そこは、一文でまとめられるということだったので、これからの議論かなとは思うんですけども、うまく整理するやり方も考えないと、皆さんの頭に入ってこないというか、また羅列したときになってしまうので、そこはちょっと考えたほうがいいかな、というふうに思いました。

じゃあ、奥多摩らしさをどう表現するか、というところが非常に重要になってくるんですけども、事実として、国立公園であるとか、森が9割4分であるとか、そういったところは事実としてある。もう一つは、住民ワークショップとかでもやっているように、住民が考えている誇り、そういったところもありますので、そういったところはしっかりと留めなければいけない。「自然が景観でいい」とか「食がある」とか「人の気質がいい」とか、それだけだと、町民だけの言葉だと、どこにもあるような話になってきてしまうので。じゃあ、何が奥多摩らしさかと考えたときに、その事実と町民が考えていること、それをつなぐものは何かと考えたときに、そういった自然が生んだ生業とか文化ということが、その事実と町民の言葉を結びつける言葉に、接点になるんじゃないかな、とちょっと考えました。だから、そういったところをちょっと表現でできるようなビジョンでいったらいいんじゃないかな、と。ちょっとぼんやりとした表現になりますけれども、そういった形でまとめられたらいいんじゃないかな、と思っております。

原島（俊二）委員長

野坂先生、お願いします。

野坂委員

これは、ちょっと私も奥多摩に住んでいるわけではなくて、ちょっとこのビジョンの図の見せ方とか、そこがちょっと一つ気になったんですけど、中核にも柱にも、その性質も違う2種類のものが同じ箱の中に混在していて。その中核を見ると、例えば国立公園とか水源というのは、奥多摩がすでに持っている地域資源なわけですけども、「住む人の誇りとなりわいのマッチ」というのは、それをどう活かしているかということで、これが一緒に置かれていて、前者が資源で、後者が運用になるんですけど。また、柱の部分を見ても同じことが起きていて、「日帰り通過型から滞在・再訪・関わりへ」というのは、これから起こしていく変化なんですけど、「首都・東京に一番近い大自然」というのは、これは計画を実行しても変わらない、もともとある前提条件なので。ここが何か区別されずに並んでしまっているのも、ビジョン全体の設計思想として、ちょっと資源と行動を分けて考える軸が、まだ図に反映されていないのかなと感じました。

こういうふうに今後、資源と変化を分ける軸を新たに立てた場合に、事務局としては、事務局というか、さとゆめさんですかね、としては、変化側の、例えば「なりわいとのマッチ」や「滞在・再訪への転換」というものを中核の中心に据えるイメージであっているのか、あるいは、やはり資源というのを前面に押し出すという考えなのか、ちょっとお伺いしたいんですけど。

さとゆめ・八間川

はい、ありがとうございます。資源と行動という二軸混在というご指摘、そのとおりだなと思い、とても分かりやすくご指摘いただきました。私ども、重きを置きたい部分としては、まずビジョンとしては、資源と行動どちらか、というイメージはなく、ビジョンについては「資源があってこそ、それをみんなで行動していこう」というビジョンです、と。抽象度が高くなりますが、そういった方向性で。計画の中の書き込みについては、まず第一章で資源と課題がある、その中でどういう姿を目指すから、こういう行動だ、という章ごとに分けたいと考えております。ですので、こういった行動をとっていこうというのが、次の第4章の部分に整理をするところです。おっしゃるとおり、ちょっとビジョンの中に資源と行動は混在してしまっているんですけども、資源があって、それを踏まえた行動をするという大きな方向性があり、具体的なアクションというものを第4章以降に書き込んでいくというようなイメージでおります。回答になっておりますでしょうか。

野坂委員

ちょっとどちらなのかな、という点で。もちろん両方というのが、振興計画として当たり前だと思うんですけど、その両方を一枚のビジョンに同居させようとすると、結局どちらにも刺さらない、ということにもなりかねないので。この点でちょっとどういうふうにお考えなのかな、というところをお伺いしたいと思います。

さとゆめ・八間川

ありがとうございます。ビジョンのまとめる部分については、観光振興計画としては、両方という前提はありつつ、外向けに、町がどうなりたいか、外の人に来てほしいと思う町がどのような町になるか、というような方を、分かりやすく言うとビジョンとして掲げたいと考えております。そのために、今ある資源ですとか、かつそういった意味合いで、じゃあ自分たちに帰ってくる、ですとか、外向と暮らしが循環というか、マージしていくようなところを、派生として書きたい

と思っておりますが、一番上に掲げる将来像としては、「こんな町に、外の人に来るような、このような町にしたい」というところを書き込みたいと考えております。それに対して、まさに先ほどのお話がございましたが、自分たちがこういうアクションをしていこう、というのを4章部分に書き込むというイメージでおります。

野坂委員

今おっしゃったような、やっぱり地域への循環とか還元というところが、やっぱり一つキーワードになると思うので、そこはちょっと強調されたらよいかと思います。以上です。

さとゆめ・八間川

ありがとうございます。

事務局・大串課長

内向きというか外向きというか、そこが混在してくるところと、あとは大事な視点として、田治米さんから「六長計（第6期長期総合計画）が『私が』という形で主語がある」というところで。六長計はやはり町民の皆様向けに、町としてこうしていこう、というところ。六長計も行政主導ではなくて、住民の方、それも特に若い世代、職員も若手でワークショップも行っている状況もありますので、行政主導ではなくて官民連携、住民の方との協働という形がありますので、やはりそこは観光産業振興計画の中でもやはり大事にして、町として住民皆様と一緒にこういうふうに考えているので、観光客の皆様に来ていただきたい、もしくは関係人口という形で、より町に寄り添ってもらいたい、という視点は大事ななというふうに改めて思ったところです。

委員の皆様からのところで、個別に感じたところを申し上げさせていただきますが、まず原島幹典副委員長から、町全体が平準化ではなくて、という形の中で。ちょっと私も正直、欠落していたなと思ったんですが、五期長計はやっぱり継続性という中で、五期長計の事業がどうだったかという評価はして、今度は六期長計を踏まえての観光産業振興計画なので、その視点はあったんですが、集落というところでおっしゃられた中で、大きくは小河内地域、氷川地域、古里地域、さらには今は21から18の自治会がありまして。かつて、観光協会長と幹典さんも参加されていたかと思うんですが、観光ビジョン、その21世紀のビジョンの中で「山里歩き」のパンフレットを作られて、そこは町全体ではなくて、個々にそれぞれの地域の魅力があるという形でまとめられたパンフレットですので、それを今現在も観光協会を通じて配布をしています。そこは事務

局として欠落していた部分ですので、改めてパンフレットをさとゆめさんと共有させていただいて、町全体・平準化だけではなくて、それぞれの集落でこういった視点がある、と。その大きな部分としては、例えば「むかし道」という形で、そこは集落をまたいでいくところもありますけれども、ただやっぱり一本道で、やっぱり日原であったり、小河内であったり、私のところでは大丹波だったり、やっぱりそれぞれまた違う部分もありますので、ちょっとやっぱりその視点は、この観光産業振興計画の中でも持っておきたいなと思いましたので、そこは次回に向けて整理をしたいなというところです。

一方でやっぱり大きなところとして、今までですと「自然と清流の町・奥多摩」という形で、やっぱり豊かな自然だということではイメージできるということもあるんですが、やはり観光誘客を図りつつも、自然の保全という形の中で、やっぱりマナーよくこの自然を守っていかないといけない。ここは町民の方だけではなくて、来ていただく方にも意識してもらいたいというところが大事ですので、そういった部分では、やっぱり国立公園というキーワードは、やはり大きく入れていきたいなというふうに私としても思っているところです。そこは委員長からもありましたように、まちづくり委員会がやはりここで国立公園・ナショナルパークというところを全面に出して、というところがありますので、そこは連携しながら、この観光産業振興計画の中でも落とし込んでいきたいなというふうに改めて思ったところです。

一方で個別的なところで、小笠原委員からは創業というところがありましたけれども、六長計でやはり起業の支援、創業の支援というのは大きなキーワードで出ていますので、ここは個別的なところで、やはり具体的にどういった取り組みができるのか、財源も確保して補助制度等も含めてできるのかは、各論の中でやはり示していきたいなというふうに考えたところです。

そういった一方で、自然も含めてペットというキーワードもありましたので、ペットのところをどう考えるのか。ここは計画だけではなくて、ちょうど今、グルメマップを今年度作成していますので、グルメマップの中に。先週の委員会（協議会）の中でも、焼き魚が食べられるところだったり、ジビエが食べられるところだったり、そういったところをもっとPRしたほうがいいのではないかという意見が協議会の中でもありましたので、グルメマップ作成の中で今年度も動いていますので、例えばそこにペットのところも入れ込むとか、やはりそこは大事ななというふうに思ったところです。

一方で鈴木委員からは、やはり奥多摩・多摩川であったり、多摩川の支流に各釣り場、内水面がありますので、やはりそこは大事なところを、改めて観光立町を進めていく中で。昨年 70 周年で調整が始まりました、大丹波釣り場が今年 70 年。やはり町が始まったと同時に、その河川を利用して誘客が図れるんだという形で各釣り場ができた経緯もありますので、やはりそこは再確認して、維持継続ができるような形にしていきたいなと改めて思ったところでございます。

一方で青木委員からも、木材という形のキーワードがありまして。ここは後ほどの資料説明のところで、先週金曜日も林業振興事業協議会、原島副委員長が会長の協議会の中でも、やはり木質資源の活用という形がありましたので、そういった視点も改めて大事だなというところと、あとは空き店舗という話もありましたので、そこは場合によっては創業のところにも絡んでくるところだなというふうに改めて思ったところでございます。ざっくりですが、皆様のご意見を踏まえて、事務局課長として私が今考えたところを述べさせていただいたところでございます。

原島（俊二）委員長

非常に貴重なご意見、ありがとうございます。本日、今皆さんから出た意見をうまく調整して、いいものを作っていたきたいと思います。

第 5 期長総の観光事業の作成委員であり、実は私たちが作った「山里歩き」なんです。21 の自治会があるので、21 のお宝があるんだろうということで、自治会長にアンケート調査して、その集落の宝物みたいなものを出してもらって、そこを、新しく道を作るんじゃなくて、生活道でいいからそれを細かく紹介していく。そして、うちはやっぱり山村の文化、山村の暮らし・文化みたいなものを理解してもらおうという、そんなコンセプトでやらせてもらいました。あれからもう 10 年ぐらい経っちゃってます。

映画評論家の川本三郎さんという方の本に書いてあったんですけど、東京は震災と戦災でどんどん膨らんでいったと。最初、東の方は葛飾なんて本当に田舎だった。その「近所田舎」という、その辺を読んでいたそうです。その「近所田舎」という言葉が非常に引っかかりまして、奥多摩の「近所山村」と言ったらどうか、と、一つそんなことを思い出しました。ちょっと余計な話をしてしまってすみません。

それでは、4 の（1）の観光産業振興計画策定については、あと②番の、誘客の想定ターゲットについて、説明をお願いいたします。

【議題（１）-② 町への誘客の想定ターゲットについて（資料－１ P13）】

さとゆめ・八間川

はい、ありがとうございます。ではお手元 13 ページ目をご覧ください。こちらは先ほどのビジョンとは異なり、仮説を示した上でご意見を伺いたいと考えております。先ほど協議事項 1 点目の際に、そもそもビジョンが外向けなのか内向けなのか、というお話もございましたが、外向けに「このような町になるから、こういう人に来てもらいたい」という部分として接続する事項となります。

まず、主たるターゲットとして①番に記載しております。首都圏や近隣からの日帰りのアウトドア、登山や行楽層として考えております。実態としてアンケートを踏まえても最も多い層となっておりまして、この方々に滞在にさせていただき、また繰り返しお越しいただく。最大の課題である日帰り・返中の転換に直結させたいと考えております。また、今「近所田舎」というお話がございましたが、まさに都心から最も近い自然という強みが最も刺さる層として、こういった層を主たるターゲットとして考えておるところでございます。

また、育成をしていくターゲットとして、東京アドベンチャーラインを起点としたアドベンチャーツーリズムやサステナビリティ志向のある層を、育成ターゲットと置きたいと考えております。こちらは国内・インバウンドを問わず、志向性として捉えております。「インバウンド」というふうに単独で、そのカテゴライズ属性だけを前面に出しますと、お話に上がっているようなマナーの問題など、様々なご意見があるというふうに承知をしております。一方で、そこにかける、サステナビリティに関心のある層、まさに国立公園に遊びに行ける体制ができるというような、自然ですとか環境に関心のある層であれば、奥多摩町様とよくマッチするのではないかと、いうふうに考えております。そういった観点から、主たるターゲットと、さらに今後育成をしていくターゲットというふうに考えているところです。

またその上で、ターゲットとは異なるレイヤーとなりますが、再訪から……一般的な観光の方々が、まずは再訪していただくというところが、狭義と申し上げますが、観光産業としては一番のステップとして目指しておりますが、その再訪からさらに関係人口、そして移住や定住への広がりという部分も、計画には書き込みたいと考えているところでございます。まさにワーク

ショップ内で「住む誇り」や「若い世代の呼び込み」という声があったところも、観光としての外向けのなりたい姿、誘客するターゲットに加えて、そういった広がりも考えている、というところは言及をしたいと考えております。

また、現状の来訪者について、先ほど申し上げたアンケートから見える現在のところを記載しております。まず1点目、来訪者層として3つに主に分けております。①が初回から数回の定番の周遊層というものがいらっしゃるように読み取れます。半数程度となっております、こちらは消費単価、1人当たり・1回当たりで算出をしております、5,544円程度。また②の来訪者層として、4から9回目の移行層という方々が22%。こちらの層が最も宿泊率が高いように出ておまして、34%となっております。また、宿泊があるせいかと理解をしますが、単価も8,338円と最も高い単価となっております。最後に、10回以上の常連層です。こちらは山や昔道に多くいらっしゃる方々でございまして、日帰りがそのうち80%となっております。都内近郊にお住まいの方々というように読み取れます。こういった方々は単価が6,556円となっております。

したがいまして、①の初めていらっしゃる方々が、いかに②の層になっていただけるか、そこを引き上げていくのか、どういうふうに②の層を厚くするのか。これが今後の打ち手の中心になるものではないかと考えているところでございます。具体的なその打ち手・施策ですとか、宿泊率や単価をどこまで引き上げるのかという目標値については、今後アクションプランとして第3回で協議をお願いしたいと考えております。本日につきましては、先に申し上げた①の主たるターゲットと、②の育成をするというターゲットの置き方について、ご意見を頂戴できればと考えております。

原島（俊二）委員長

ありがとうございます。それでは早速ですが、①、②のターゲットについて、何かご意見・ご質問がありましたらお受けいたします。

さとゆめ・八間川

ターゲットについて、コメントがあればぜひお願いしたいなとは思っているところでございます。

田治米委員

これ、あのビジョンが定まらないとターゲットも定まらない気がしているので、多分これは何回も行き来しないといけないかなと思っているので、第3回も含めて、ここは議論した方がいいかなと思っています。これまでの議論から導き出されたところ、そういう議論の積み重ねでこの①が出てきていると思うので、ここに集約するのではないかなという気がしていますが、ちょっと決め打ちに見えてしまうので、そういうビジョンとの関連性を考えないと腹落ちできないので、ちょっと意識したいなと思っています。

で、この下のライフスタイル像のところがあるんですが、多分これは①のところがメインだと思いますので。だから、どういったターゲットか、ビジョンが定まってターゲットが定まって、その次に多分 KPI が来る。それは次の段階でって話があったんですけども、ターゲットによってその KPI も変わってくるので、そういったところも含めて、ちょっと考えていった方がいいかなと思っています。

①は多分このぐらいの単価で、多分日帰りが多くて、都心から来る人が多くて、って話になると思うんですけども、②だと、より奥多摩をめがけて最初から来る方、それは都心の方もいるでしょうし、もしかしたらインバウンドの方もいるかもしれない。SATOLOGUE でも結構、1 週間ぐらい日本を回遊されて、最終日に羽田・成田から帰るので 1 泊少し時間がある、そこで SATOLOGUE を見つけてくれて、1 時間半ぐらいで来れるのでそれで泊まっていたとか。

「それで、じゃあ何かアクティビティない？ 最後、日本らしいことしたい」「じゃあ、わさび田ツアーをちょっとご案内します」みたいなことまで、すごい喜ばれたりするんですけど。そういう意味では②の……そうすると消費単価も、多分日帰りがメインじゃなくて宿泊になっていった。SATOLOGUE に泊まれたら、多分もうそれだけ宿泊で 5 万円で、ツアーに行ったらもう 1 万円プラスで、それでお土産買ってもう 1 万円です。そうすると消費単価が多分 7 万円とかになってくるんですよ。なので、②の KPI は「どういった方」っていう解像度をもうちょっと入れた方がいい、っていうのと、それに対する KPI にしっかり根拠を積み重ねていくと。例えば鳩ノ巣とか、私たちの SATOLOGUE に来る人の顧客の全部のデータは出せないんですけど、そういったものにイメージが湧くような形でお出しするっていうのはできると思うので、そういったような重ね方で。

さとゆめ・八間川

ありがとうございます。

原島（俊二）委員長

はい、ほかにどなたかいらっしゃいませんか。それでは、小林さん。

事務局・小林アドバイザー

奥多摩駅から白丸の方まで歩いている方がいらっしゃるんですけども、ちょっと大抵、途中で戻ってきちゃう、もしくは橋のところから戻ってきちゃうような感じなので。その先にはVERTERE（バテレ）さんがあって、工場見学なんかもいろいろできるので。一応、観光地っていうと、散策ということで、あてもなく歩いていて、ふと出会ったものみたいな、楽しい出会いというものもあるので。アクティビティの強化っていうのは、やっぱり初見の人とか、なんとなくレンタカー借りてきたとか、電車で降りてちょっと歩いてみた、っていう方にとっては、かなり新鮮になるので。ぜひ白丸の方まで行くところで、ポツポツと何か楽しめるものがあったりするのかな、ということで。日帰り温泉とか、シルバーアクセサリ体験とか、ちょいちょいあるので、そういうところがもうちょっといくつかあると、歩く人も何かを得るのかな、っていうのを期待しているところがあります。

原島（俊二）委員長

ありがとうございます。他にどなたかご意見ございますか。よろしいですか。

原島（幹典）副委員長

対外的に、そのターゲットっていう観点から思うことは、極力、その、なんて言うんですか、大勢の方にあまねく来てほしい、という言い方ではなくて、「こういう場所であり、こういうお迎えの仕方や、こういう活動が目的の人に、ぜひ来てほしい」という、初めから絞っちゃった情報発信の方が、私は魅力があると思っています。

この奥多摩で、過去にもそういう象徴的な集客があった事例もありますので。例えば、柿、渋柿をですね、放置すると、熟した頃に熊が来て、集落の人も困る。だけど、もうその渋柿を取って干すようなことはしても、どうせ猿に全部食われちゃうし、もう高齢化でできない、ということ逆手にとって、「じゃあ、柿もぎに皆さん参加してくださいよ、半分ボランティアで」ということを、かつての観光産業課の方で募集した。

原島（俊二）委員長

1,000 人くらいあったんだね。

原島（幹典）副委員長

もう回線がパンクするわけないの、という反響があつて。そういう地域だと思ってます。だから、思わず目が止まる、思わず行きたくなるような、ネタ出しができるかどうかじゃないかなと。

それには、その背景に、その受け入れ先という、あるいはそれを誘う人とか、案内してあげる人とか、というのが、地元側にどうしても必要になってしまうので、先ほど申し上げたような、その集落単位、あるいはその集落のさらにもっと狭い、数軒の協力というものがなければ、魅力的な情報発信ができない。全部、外側の方たちが面白がって、わーっとやって、にぎわって、もうそれは集落にとっては、なんか知らん人が来て、大勢来て、わーっと騒いで帰っていった、ということに映ってしまうので、それは決して観光振興とは言わないだろう、と思います。

何を出すか、参加してもらえるような情報を発信ができるか、だろうと思います。できることであれば、その参加することによって、この集落の人たちが元気になるような仕組みで、それが、その参加者にとっても喜びにつながるようなツアー企画が出せれば、それはリピーターにもつながるし、単に自分たちの楽しみのために来る観光から、参加することによって、地域の人たちの力にもなれている、半分ボランティアみたいな意識がお客さん側にも芽生えれば、それはすごく素敵な展開が生まれるような、そんな気もするんですね。はい、以上です。

原島（俊二）委員長

ちょっと私事になるんですが、幹典さんと二人で「山村文化に触れる会」という会を作りました。昔の話です。随分昔の話ですけど、山仕事をしている人を師匠に招いてきまして、その人について山仕事を体験したりとか。そうすると、新聞にちょっと載せてもらえるわけで、断り切れないくらい申し込みがありましたね。私たちのことだから、2 回目は続かなかったですけどね。3 年間くらいやったんですけど。また余計なことを言ってしまいました。

はい。野坂先生、何かアドバイスございますか。

野坂委員

初回から2回目の再訪率を上げたい、ということなんですけれども、これはちょっと興味深いのが、データが山形になっているというか。初回から数回の層は宿泊が少なめで、4から9回の宿泊が3割で最高、また10回以上になると8割が日帰り、ということだったので。回数を重ねれば宿泊に近づくという右肩上がりじゃなくて、4回、9回目でピークを迎えて、10回以上になるとまた再び日帰りに戻る、日帰り8割というデータが明らかになっているんですけれども。ここで4回、9回目の層に特有な何か別の要因があったかどうかというのは、アンケートでは明らかになっていないんでしょうか。お伺いしたいんですけれども。

さとゆめ・八間川

はい。再訪の理由というところですか、4から9回目、そうですね。再訪の理由については、質問としては設けておりますが、具体的な記載の回答がなく、ちょっと解像度が低いというところですね。

野坂委員

ここが大事なのかと思うのと、それからやっぱり、宿泊までの道筋って、何か仮説を持っているんですか。つまり、回数を重ねればやっぱり自然に宿泊化する、という想定であれば、この山形のデータとは整合しない可能性があるんで、ちょっとここの認識を揃えておきたいんですけれども。

さとゆめ・八間川

はい、ありがとうございます。まず、山形はおっしゃるとおりと理解をしております。③の10回以上の常連層は、まさに沿線ですとか、近隣に住まわれている方で、もう日帰りで山に登りに行く、もうそれが日課ではないですが、仲間の方々と日常的にいらっしゃっている方というような方々が③になっておられます。ですので、①から②への移行はあるんですけれども、②と③はまた違う層のように読み取っているところです。ですので、仮説という点については、本当に「初めて奥多摩来てみたよ」というような①をまさに②に上げるというところは考えつつも、③はそこからつながるというよりも、また別の層としておられる方、というふうに考えております。

野坂委員

分かりました。ありがとうございます。

原島（俊二）委員長

ありがとうございます。他にご意見いらっしゃいますか。②については、これにして次に進んでまいります。よろしくお願いします。各所管の計画・協議会の検討状況について、これに移りたいと思います。観光商工係の説明をお願いいたします。

【議題（２）-① 観光商工係（資料－２）】

小峰係長

はい。それでは、各係所管の計画及び協議会の検討状況ということで、まず観光商工係関連の資料の２をご覧ください。資料の２は、観光商工係なんですけど、主に商工関係のことについてです。

今、現行、小口事業資金融資制度等審議会という審議会のもとで実施をしているところでございます。事業者に対しての資金融資の制度でございます。こちらに対しては、青木委員が会長を務めている審議会でございます。現行の、この審議会に関する計画等はございませんで、現行の規則や要項に基づきまして、資金融資を実施しているところでございます。

実際の施策といたしましては、設備融資、運転、開業の資金融資と、その資金融資に伴います信用保証料の補助、または、同じく融資に付随する利子補給の交付等を実施しているところでございます。実際には、融資の限度額の引上げや、そういったところを規則、または要項の改正に伴いまして実施をしているところです。

また、青梅商工会議所の奥多摩支所、こちらは小笠原委員が奥多摩支所の担当ということでなられておりますが、そちらとも連携をしているところでございます。

この小口融資制度につきましても、現行の規則や要項の評価というところで、町内事業者への支援の仕組みの整備というところで、まだまだ、この融資規則や要項などが、実際に現状、いろいろな多種多様な事業者が出てきていたりとか、実際に現在の世界情勢だったりとか、景気の動向等で流動的なところで、なかなか事業者への柔軟な支援というのが

できないというようなところもございまして、実際に要項や規則などを整備する必要が出てきているというようなところがございます。

もう一つは、先ほどビジョンの部分でもありましたが、創業・開業支援の事業の不足というようなところが、実際には課題となってございます。

また、3番の六期長計の内容というところでは、活性化の部分で「生まれる・育む・挑むまちづくり」というところで、施策の方向性として、六期長計にも起業の支援、また創業支援の推進というようなところが組み込まれておりますので、やはり、この六期長計に基づく観光産業振興計画というところがございますので、こちらも重きを置きまして、観光振興計画の方に盛り込みたいというようなところでございます。

最後に、今後の方向性というところでございますが、こちらは2の課題の解決から、(3)の六期長計の実現というようなところで、創業スクールの活用（運営：青梅商工会議所、青梅信用金庫）でしたりとか、創業・起業講座の実施、また創業支援、創業者への補助金の検討などを、観光振興計画の中で位置づけられれば、というようなところで、観光商工係としても考えているところでございます。この第2回から第3回の間に、小口事業審議会を開きまして、各委員の皆様からも、どのようなことがあるかというようなところで検討をさせていただいて、第3回のところでお示しができればな、というふうに考えているところでございます。雑駁でございますが、資料の2番の説明は以上となります。

原島（俊二）委員長

はい、ありがとうございます。今の説明に続けて、何かご質問の方がありましたらお聞きいたします。

小峰係長

補足ですみません。課題のところの創業・開業の支援事業というようなところだったりとか、創業・起業の講座の実施とか、というようなところは、報告事項の①のワークショップの結果などの課題点とか、そういったところの不足している部分でしたりとか、そういった町民の皆様のご意見も踏まえながら、そういったところの起業の創業だったりとか、企業の支援というところが

できれば、というようなところでも、観光産業振興計画の中に位置づけたいというふうに、事務局の方では考えております。以上です。

原島（俊二）委員長

ご質問ないようでしたら、後でまた、お聞きいたします。②の農林水産係、資料3をお願いいたします。

【議題（2）-② 農林水産係（資料－3）】

加藤係長

それでは、農林水産係のところで、資料3の方をご覧ください。農林水産係で関係する協議会としまして、まず、内水面漁業振興事業協議会でございまして、先日、会議の方を開かせていただきました。

①の現計画としまして、内水面漁業振興計画が、令和3年から令和7年度までの5カ年の計画でございました。将来像としまして「楽しみ・たたずむ溪流美 奥多摩～釣り・グルメ、山里の魅力～」という形でなっております。施策としましては、1、管理釣場の魅力の向上、2、養殖の推進、3、遊漁の推進・生態系の保全、4、川を通した交流・人材交流というようになっておりまして、主に施設整備事業、ハード面、こちらは東京都の補助金を活用して、各釣り場、各漁協の養魚場での施設整備の方を推進して行っていました。また、ソフト面の取り組みとしましては、PR動画やグッズ等の制作ということで挙げられておりました。

2、課題としまして、現計画の評価としまして、1でご説明しました内水面漁業振興計画の状況としましては、まず、ハード・ソフトは計画通りかというところですが、ハード面、施設整備につきましては、計画の中で予定していたものは、ほぼ実施ができており、施設の整備等はかなり進んでいるという状況でございます。しかし、もう1点のソフト面の取り組みにつきましては、計画の作成当初から、ソフト面の前に、まず施設整備、ハード面の方を重視して行い、その後にソフト面の方も行っていく、というような考えで進めていたところではございますが、ちょうど計画の期間に新型コロナウイルスの感染症もあり、ソフト面については、ほぼほぼ手がつかずに、未達成というような状況になっております。

また、各釣り場の体制確保、経営の安定化としまして、各釣り場、各漁業組合さん、特に漁業組合さんの方は、職員の方の高齢化がかなり進んでおり、奥多摩漁業協同組合さんにつきましては、地域おこし協力隊の活用を行い、育成の方等を地域おこし協力隊の方で行っているというような状況でございます。

六期長計の内容としまして、コンセプトは活性化、将来像としましては「賑わう・満ちる・巡るまちづくり」となっておりまして、施策の方向性としましては観光資源の活用、取組例としましては、内水面漁業や自然系アクティビティ等の活用となっておりまして、特に内水面漁業の活用といった面につきまして。

4の今後の方向性につきまして、まず、上期に課題というところで、ハード面、ソフト面等を挙げさせていただいたことに対しての解決に向けた取組、また、六期長期総合計画の実現に向けた取組、また、奥多摩やまめ、またその加工品である「やまぼこ」の活用。こちらにつきましては、需要はかなりあるというふうに聞いておりますが、奥多摩やまめの養殖、また「やまぼこ」の生産につきまして、なかなか供給が追いついていないというような状況がございます。

また、その他、各委員からの意見というところで、今後、各管理釣り場での利用者にアンケート調査もしながら進めていければと思います。また、先日の会議で、各釣り場・各漁協さんからあったご意見で特に多かったものが、近年、釣り場に来るお客さんも、かなり需要が変わってきているというようなところがございまして、各釣り場とも、これまでの1日券が主だったところが、半日券であったりですとか、さらに1時間、2時間など。1回以下の釣りがメインではなく、ドライブや町内観光に来て、釣りも楽しみたい、というようなお客さんがかなり多いというような話は伺っております。また、これまで釣った魚は、内臓を取って持って帰るというお客さんが多かったというように聞いておりますが、最近では、釣った魚をその場で塩焼きにして食べて、あとは特に持ち帰りもしなくて、そのまま釣り場にお魚を置いていかれるお客さんが多いというような話も聞いておりますので、今後、10年後などになっていけば、さらにこういったところも変わってくるのかな、というような話も伺っているところです。

続きまして、裏面の方をご覧ください。こちらが、農林業等振興事業協議会に関するものになります。こちらにつきましても、先日、会議を行わせていただいた中での皆様からのご意見等をご説明させていただきます。

まず、1の個別の計画としましては、農林業等振興事業の個別の計画は、これまで特にございませんでしたので、長期総合計画の中に記載されているというような形になります。「みんなの力がつながる観光産業づくり」ということに対しまして、施策としまして、奥多摩だからこその体験・交流観光の展開、奥多摩ならではの地域産業の推進、観光産業づくりを推進する力の強化、というような内容になります。

2の課題としましては、これまでの計画の評価で、特に課題となりますものが、農林産物グループへの支援、出荷・販売の仕組みの整備といったところで、作った農林産物の直売所的なものの整備が、なかなかできていないといったところでございます。2つ目が、放牧場（条例存置も事業撤退）の放置。こちらにつきましては、わらび等の山菜の栽培育成を行っているところでございますが、なかなか栽培はうまくできず、わらび等の収穫量もほぼないような状況で、停滞しているというような状況でございます。3つ目が、都民の森・蕎麦打ち施設が未活用となっている状況でございます。こちらにつきましては、平成24年度までは指定管理施設ということで、事業者が入り、そば屋を運営しておりましたが、24年以降、こちらの事業者が撤退して、募集をかけておりますが、募集がなく、これまで長期間、未活用になっているという点がございます。

続きまして、(3)六期長計の内容としまして、コンセプトが活性化、将来像が「生まれる・育む・挑むまちづくり」、施策の方向性が観光資源の開発、取り組み例としましては、新たな特産物の開発・開発支援の充実。将来像「創る・繋がる・広がるまちづくり」、施策の方向性として、幅広い世代が参加できる事業の充実・開拓、取り組み例としましては、観光客や関係人口が参加できる事業の開拓（体験農園）。将来像「賑わう・満ちる・巡るまちづくり」、施策の方向性として観光資源の活用、取り組み例としましては、内水面漁業や自然系アクティビティ等の活用、また、わさび、治助イモ、鹿肉等の特産物の活用となっております。

(4)今後の方向性として、先ほど(2)で挙げた課題の解決、また(3)六期長期総合計画の実現に向けた取り組み、また、その他、各委員からのご意見として、新たな特産物としましては、一つとしましては柚子。また、現在、クマにつきましては保護動物ということで、有害で捕獲した際も、大学への検体の提供、または埋設というような形で対応しておりますが、来年度以降につきましては、クマも計画的に捕獲していくというような流れになっていくかと思っておりますので、そういった場合に、クマの肉、肉だけでなく皮、その他のものにつきましても、かなり珍しいものになってくるかと思っておりますので、その辺りを特産品として活用していけるか、そういったところを検討していければ、というふうに考えております。

また、農林水産係としましては、下にあります治助イモ普及促進協議会、農業推進協議会、こちらの協議会もごございますので、こちらの協議会につきましても、9月下旬の開催を要請しております。第3回の策定委員会での報告をさせていただければ、というふうに考えております。農林水産係につきましては、以上となります。

原島（俊二）委員長

ありがとうございました。それでは、先ほどの話を農林水産の方で述べられましたけれども、関連しまして、遊漁者から要望といいますか。1日券とか、午前・午後の遊漁券、そういうのがあるんですけども、何かというと、その場で食べたいんですけども、そんな時間はやらないと。1匹か2匹、そういう券がないか、という。確かに、2匹釣って食べてもらって、それを収益にして、食べていただく、というふうな事例があるんですけども。

また、委員の中から、（魚を）持ってきて、それを焼いてもらうのに時間がかかるというので、前もって予定を聞いて、その前に持ってきて、焼き台をもらって交換をすれば、待ち時間が少なくて、急いで帰る人は助かるんじゃないか、と思いますね。

それから、水遊びは禁止なんですよ。それから、水遊びをしたい人のために、安全な場所で、夏のようなところで、そういう場所を作ってやりたいところとか。それから、釣り場は仕切られているんですけども、家族だけで釣りたいというようなご要望があって、単価を設定して家族だけの釣り場を作る、ということもあります。

今、この奥多摩町には4つの釣り場があります。今は3つ稼働しているんですけども、そういうところがお互いにノウハウを出し合って、漁協の意義を訴えていこうと思います。

原島（俊二）委員長

ありがとうございました。お客さんにたくさん入ってもらうために、いろいろと工夫をしているという話が今までありました。資料3についてのご質問がありましたら、お願いいたします。それではまた何かありましたら、後でお伺いします。

【議題（2）-③ 森林保全活用係（資料－4）】

原島（俊二）委員長

3号、森林保全活用係のあたり、資料4の説明をお願いします。

事務局・大串課長

はい。本日、森林保全活用係の鈴木が不在でございますので、私の方で資料の説明をさせていただきます。時間の関係もありますので、ポイントのみ、すみません、読み上げさせていただきます。

この林業振興事業協議会、この副委員長であります原島幹典様が会長でございますけれども、先週8月21日、金曜日に1回目を行い、課題等の整理をして、2回目は11月に予定をし、この（策定委員会）3回目の前に2回目を実施という形で予定をしているところでございます。

1として、現計画としては、木質バイオマス利活用計画（平成23年2月策定）、もしくは木質資源循環システム構築計画（平成24年2月策定）がございます。一方で、今年（令和8年4月）樹立した森林整備計画（10か年計画）、こちらとの計画に倣う形でございますが、策定をしているところでございますが、全体として、第5期長総の中では、ご覧の形の目的像、将来像、もしくは施策という形がありますけれども、課題整理の中で、未達成の取り組みということで、矢印がありますけれども、①の木質バイオマス資源利活用システムの推進、もしくは②の森林ボランティア・交流観光と連携する取り組み、③の木材搬出の促進。特に①は今、計画が頓挫している状況でありますので、2回目の協議会では、事務局としては、ここで廃止という形で提案させていただきます、本来であれば新たな計画を同時に策定なんです、こちらについては慎重に、今後3年後なのか5年後なのか、先進地事例等の確認をしながら、新たなシステムを構築という形で進めていきたいと考えているところでございます。

②については、やはりこちらも未達成のところでありまして、やはり先ほどの意見交換でもありましたが、奥多摩町の資源、関係人口、観光客、誘客の中で、ボランティア、もしくは交流観光という形で、やはり推進していきたいということで、事務局としては今、継続していきたいと考えているところでございます。③についても、町内94%が森林でございますので、また、森林再生事業等もございますが、そういった中での木材をより活用できないのかという形で、継続して推進をしていきたいというところでございます。

②という形で課題も整理をし、一方で、昨年から森林環境税の徴収が始まっておりますけれども、町で今、年間ですと約 5,000 万円が歳入という形で財源として入ってまいりますので、そちらをどういうふうに有効に活用していくのかというところも、この林業振興事業協議会で今後の検討課題となっているところでございます。

3 として、六期長計においては、林業の関係は大きく 2 つ関連があり、ご覧の持続化、もしくは活性化の中で位置づけがなされているところでございます。

裏面をご覧いただければと思います。4、今後の方向性ということで、こちらは 2 回目の 11 月の協議会で、より踏み込んで、というところでございますけれども、森林保全活用系の事業を今、中心ではあるんですが、ちょうどここで国が新たに、6 月に閣議決定で、新たな森林・林業基本計画を決定したところでありますので、こちらは、あえて「林業」ではなく「森業（もりぎょう）」というような形で、「森業の推進」、山の地方創生という形で打ち出しております。そういった中で、森林空間の活用では、奥多摩町は森林セラピーをもう 10 年来推進しておりますが、そういった取り組みを今後さらにどうしていくのか。もう一点は、企業とのつながりという形で、奥多摩は今、野村不動産「つなぐ森」ということで、寸庭のところを整備いただいておりますけれども、さらに野村不動産としては今、川井の跡地を買収されて、そこを拠点にして野村不動産として展開をされたいという動きもありますので、より町としてもやっぱり密にしていかなければならないのではないか、ということで、事務局としてご説明を前回の会議でさせていただいたところでございます。

付随して、農林水産にも関わってきますので。今、国は「森業」、あえて「林業」と言わないで「森業」、「農業」と言わないで「里業」、「漁業」と言わないで「海業（うみぎょう）」という形で、それぞれ地方創生を進めていくという形で打ち出しておりますので、特にこの「森業」のところでは、新たな林野庁、国の補助事業、もしくは政策等もあろうかと思っておりますので、そういったところも確認をしつつ。表面に戻りますが、木質バイオマス資源の循環という形をどうしていくのか、改めて再構築をしなければならないという中で、国の動きにも注視していこう、ということで、事務局として説明をさせていただいたところでございます。以上、すみません、駆け足で雑駁でございますが、資料の説明でございます。

原島（俊二）委員長

ありがとうございました。最後のところまで、何かご質問がありましたらお願いします。

【議題（３）その他 諮問３ 国立公園内における各種補助制度の活用について（資料－５ 当日配布）】

原島（俊二）委員長

それでは、国立公園内の各種補助制度の活用について、資料５をご覧ください。説明をお願いします。

小峰係長

はい、こちら資料５につきましては、本日当日の配布となりましたことを、まずもって委員の皆様にはお詫びを申し上げたいと思いますので、ご承知をお願いいたします。

こちらですね、国立公園等の資源整備事業費補助金ということで、環境省の国の補助金を活用してというようなところのメニューの抜粋になっております。

一つはですね、国立公園等の利用拠点、滞在環境等上質化事業というところでですね、ご覧のメニューがございますけれども、こちらの方で当てはまるといいますか、町の中ですね、かなり町が所有していて、廃屋になっている施設、または利用されていない施設等がございますので、そのですね、廃屋撤去事業というので、この廃屋を撤去する事業に関して補助金が付く、というようところがですね。今後、この補助金を活用する中で、やはりこれも観光産業振興計画の中に位置づけて、計画的にそういったものができれば一番、再利用といいますか、その拠点を再利用するようなことができれば効率的ではないかな、というところで。この補助金の活用についても、観光産業振興計画の中にですね、今、廃屋になっている施設に限らずですね、指定管理施設というものが観光産業の中におよそ１０以上の施設がございますので、その改修でしたりとか、そういったところにも活用できるのではないかと、いうところも踏まえまして、この観光産業計画への位置づけをさせていただきたいというところです。

また、この右側ですね、国立公園等多言語説明等の整備事業ということで、この観光産業振興計画の中の一つでもありまして、インバウンドに対する観光ですとか、またですね、やはりビジョンのところにもありましたけれども、国立公園を広く打ち出していくというような部分で、この国立公園内の多言語の説明や、そういったものがですね、活用ができるのではないかとというようなところで、この補助金の事業についても、観光産業計画の中に盛り込みまして、活用ができて、推進が図れれば、というようなところで、資料の5として今回挙げさせていただいたところでございます。

こちらにつきましては、第3回に向けまして、実際、この補助金の事業がどのように進めれば活用ができるのか、というようなところも踏まえまして、お示しができればということで、一旦は、この抜粋のメニュー、またはこの事業について、概要の説明を載せさせていただいたというところでございます。以上、簡単ではございますが、説明の方は以上となります。

原島（俊二）委員長

資料5のご質問がありましたら、お聞きいたします。

田治米委員

今年度内で言ったら、二次（募集）のところに（間に合うのか）。

小峰係長

そうですね。ただ、やはり今、現時点で町の方にも当初予算がございませんので、それ以降、令和9年度以降の活用ということで、すぐ活用というわけではなくて、ちょうどこの計画に盛り込んで、令和9年度以降に活用ができれば、というような形で進めていければ、という形で。今、この令和8年の二次募集は今、行っているところなんですけれども、そこに関しましては、それを活用するというわけではなく、というところの理解でお願いしたいと思います。

田治米委員

自己負担分の縛りはないのでしょうか。

小峰係長

そうです。

田治米委員

その廃屋の撤去とか、何か対象は大体今、持っているんでしょうか。

小峰係長

具体的には、鳩ノ巢のところにある旧一心亭だったりとかがございまして。鳩ノ巢溪谷にちょっと付随しているところですね、今、企画財政課の方が所有しているというか、町の財産になっているんですが、逆に落書きがあったりとか、侵入があたりとか、という部分もありまして、治安的にも、というところで。それが解消できれば、そこを広く活用できるのではないかな、というようなところで、そこも一つの部分で考えております。

事務局・大串課長

あの、本当にざっくり、係長と私との意見交換ですが、鳩ノ巢溪谷は今、多摩川遊泳禁止、飛び込み禁止なんですけれども、岩場で遊泳して水難事故にもつながる状況もありますので。先ほど鈴木委員からもありましたが、川遊びができる場所という形で再利用ができないか、あの辺りを整理ができないか。これは、廃屋の撤去だけではなくて、その次の利活用の計画を示さないと（補助金の採択には）ならないと思いますので、そういった形での活用ができないか、というふうに考えているところです。

ただ、やはり今、物価高騰で、撤去するだけでも、動線がかなり厳しいので、かなりの時間がかかりますので、財源がどれだけ確保できるのか。早くても、新庁舎の整備後、あとは、この庁舎の旧庁舎をどうするのか、という議論もありますので、状況としてはその後になるか。ただ、やはり観光産業振興計画 10 年の中で位置づけはしたい、という事務局の考えでございます。ただ、国がいつまでこの事業をやるのか、というタイミングもあるので、ちょっとそこも捉えながらの検討でございます。

田治米委員

利活用計画とか、沿線まるごとさんは、事業に活かせるものもありますので、そういった軽い事業に活かせるかと。

原島（俊二）委員長

よろしいですか。ほかにどなたかいらっしゃいますか。

小峰係長

これもちまして、今日の報告事項と議題、すべて終了いたしましたので、委員長、最後、よろしいでしょうか。

〔次回の予定・事務連絡〕

事務局・大串課長

次回は、前回、年間計画ということでお示しして 11 月 30 日ではございますけれども。先ほど田治米様からもございましたが、今日の議題の①のビジョンであったり、②のターゲットは、意見交換で行き来する部分であり、計画の大事なところでありますので。9 月 30 日に次の町民の方のワークショップがありますから、そこでの意見、もしくは、本日の資料で 6 ページのところ、この町民向けのワークショップだけではなく、古里小学校の 6 年生の担任の先生、古里小さんとして着目いただいてですね、9 月の 18 日、6 年生の授業でワークショップを、という話がありまして。副委員長の原島幹典様は教育委員でもございますので。古里小はそういった形で、これからになると。

やはり氷川小さんからも、という中では、夏休みにかけて、学童クラブであったり、子ども教室の中で、氷川小さんは、私も以前、学童の利用が多いところもありますので、放課後事業も絡めて、氷川小さんについては、氷川小さんのご意見も、子どもたちのご意見もいただければな、という形で考えているところでございます。

そういったところは、9 月、広くワークショップ等でご意見をいただいて、10 月にやはり、ある程度、今日を踏まえ、もしくはワークショップの内容を踏まえて、事務局として、4 社協定に基づいて、さとゆめさんと書面で、11 月の 3 回目に向けてのたたき台という形で、10 月中に一度、委員の皆様にお示しをさせていただいて。いきなり 3 回目ですと、また、なかなか状況的に難しいところもあろうかと思いますので、中間というような形で、一度、書面をお送りさせていただ

きまして、そういった書面でのやりとりの後、3 回目の 11 月 30 日を迎えられれば、と思っておりますので、ご理解いただければと存じます。

11 月 30 日は、私の予定もありまして、今日は午前中なのですが、11 月 30 日は午後の時間帯で予定をしておりますので、また時間の方は改めて早めにお知らせさせていただきますけれども、次回 11 月 30 日、午後の予定ということで、ご承知おきいただければと存じます。

原島（俊二）委員長

ありがとうございます。では、議題の方も終わりました、進行を事務局に戻しますので、最後、閉会を原島副委員長の方からよろしくお願いいたします。

〔次第 5 閉会〕

原島（幹典）副委員長

はい。長時間にわたりまして、活発なご意見交換、ご説明ありがとうございました。これもちまして、第 2 回奥多摩町観光産業振興計画策定委員会を閉会とさせていただきます。ありがとうございました。

以上